

2018 年度夏季海外研修（中国語・中国文化コース）研修レポート

ソフトウェア情報学部 Kさん

この研修で私が得たかった事は、中国語の発音の矯正である。高校生の頃から中国語を独学でやっていたものの、中国語は発音がとても難しく、方言ではない本物の綺麗な「普通話（標準語）」発音の人に直してもらいたいと考えたため、今回の研修に参加した。また、北京には行ったことが無かったので、どんな街か知りたいと思ったからだ。

授業は初級クラスだった。（1班～6班までの、1班）実を言うと、2級でも良かったのではないかと思ったくらい、「你好」と「谢谢」しか分からないような本当の初心者のクラスだった。多分、中国語の世界共通資格「HSK」を持っていなかったり、大学でも1年間履修していないことから、1班にされたのだろう。しかし、後々に1班で良かったと思った。なぜなら、発音をイチから教えてくれるからである。特に、全くわからなかった「in」「ing」の違いや「qu」などの響かせ方をしっかり身に付けられたと思う。アナウンサー芸術学部の留学生と仲良くなったのだが、「私のクラスメートみたいに上手ですね」と言われた時は、今回の留学の目標を達成できた気がしたので、お世辞だったかもしれないが、自信がついた。

次に地下鉄について。地下鉄を制す者は北京を制す、と言っても過言では無いし、北京地下鉄が大好きになったので是非書いておきたい。きっかけは到着時に作った「一卡通」（地下鉄・バスなど公共交通機関のプリペイドカード）に80元チャージされており、また地下鉄はどこまで乗っても3元～7元と日本では考えられない程格安だったため、私は地下鉄のみであらゆる場所に赴こうと考えていた。伝媒大学には最寄りの「伝媒大学駅」があったのがとても便利だった。地下鉄に乗る前には必ず荷物検査がある。システムは空港のそれと一緒にだったが、空港より緩い印象を受けた。鞆などはベルトコンベヤーに置いて、人間はゲートを通る。その際、係員から体を触られたりする。また、ベルトコンベヤーの中の鞆にペットボトルを入れていると、ペットボトルを出してそれだけ検査を受けることがある。ラッシュ時はこの液体検査は省かれることが多い。

地下鉄は早くて3分間隔、遅くとも10分待つことは無い。だから、ホームに人が溢れかえる（そもそもホームに人が入りきらず階段まで侵食している）帰宅ラッシュ時は一本めの電車で人が入りきらず見送る人も多い。また、乗り換えの際は凄く歩かされるという印象を受けた。乗り換えの駅で次に乗りたい路線の表示を辿ればいつかは行きつくが、2分～5分くらい歩かされる。乗り換えの時間も考慮しておけば、余裕をもって行動できると思う。また、駅によっては出口が5つ以上あり、出口を間違えると目的地までかなり遠回りする事は確実なので、スマホでもガイドブックでも、出口は確認しておくべきであると痛感した。出口は基本的には「出口A」「出口B」といったアルファベットで、たまに「出口F1」「出口F2」という風に、番号でさらに細かく分かれている。これは「西单」という（北京の銀座とも言われる賑わっている街の）駅の話なのだが、出口を間違えて地上に出たところ、道路

が片側4～5車線ぐらい（うろ覚え）の大きな道の反対側に目的地があり、横断歩道が見当たらない為、地下道を探して彷徨った。かれこれ20～30分ロスした気がするので、出口の確認はしっかりしておけば良かった。

買い物についてはご存知のように、中国は今、キャッシュレス化が進んでいる。しかし、その便利さの恩恵に預かれるのは、中国の銀行に口座を持っている人だけで、外国人観光客は蚊帳の外である。個人的な話で、2016年に内陸部の雲南省に上海経由で行ったのだが、その時は現金支払いが当たり前だった。田舎の雲南省でも大都会の上海でも、現金は当たり前のように使われていた。上海ではスタバに入ったのだが、外国人も中国人も現金を使っていた。しかし、2018年の北京のスタバはQRコード決済。その他全ての店でQRコード決済が対応してあった。逆に現金に対応しているか不安な店しかないが、たいていの店は、別の所に現金の引き出しがある為、頼めば対応してくれた。（2018年9月現在）ただ、店によっては凄く嫌な顔をされたのが、不快だった。ショッピングモールの中のレストランとかだと、客引きの人がいるのでそういう方々に「現金使えますか？」と尋ねると、「使えます」と言ってもらえ、安心して飲食できるほか、外国人だと伝えられるので少し対応が親切にされた感じがした。

そして、日本人留学生の友達ができた事は思わぬメリットだった。研修中に金曜日が2回あったのだが、そのどちらもみんなでお食に出掛けた。（その際の割り勘は全て電子マネーの送金であったが、私が現金しか持っていない事を酌んでくれたので、現金を受け取ってもらえた。）学んでいる事は人それぞれで、多くは中国語を本格的に学びに来ているのだが、大学の学部生として来ている人も居た。その人達に「あの厳しいと噂の中国の大学受験を潜り抜けたのか」と尋ねると「いや、HSK5級あれば入れます」と余裕そうに言われた。小さいころから中国語を話せる人が純粋に羨ましかった。留学生の半分くらいが中国と日本のハーフで、中国の文化に慣れている人だった。最後の土日も彼らと出かけて沢山の思い出を作った。私は彼らの中では全然話せない方なので、彼らの店員さんや係員さんに対する対応ややり取りをボーっと見ていただけだったが、いずれ自分もここまで話せるようになればと思うと楽しかった。そして印象的だったのが、彼らが日本人以外の友人を寮の中で作っていた事だ。中国語を使ってカナダ、韓国、台湾…といった様々な国の友人と青春しているのを目の当たりにして、羨ましくて仕方なかった。私も大好きな中国語を使って、北京で沢山の友人を作ってみたくなり、授業だけでなく、こちらでも非常にモチベーションを上げてもらった。私は中国語を専攻しているわけでもないただの女子大生だが、中国にもっと長期間留学してみたいと思った。

ここには書いていないが観光とショッピングも大いに楽しめて、友人も沢山作れて、無限の中国語のシャワーを浴びることができて、とても有意義だったのを繰り返し書きたい。

ソフトウェア情報学部 Kさん

私は9月10日から24日まで、中国・北京市の中国传媒大学での夏季海外研修に参加した。私は中国語はほとんど理解できず、2年次の第二外国語にも中国語を選択してさえいない。本研修には中国出身の友人に誘われたため、加えて外国へ行ったことがなく海外の風土を感じるいい機会だと思ったため参加させていただいた。研修前、渡航まで3ヶ月程度あったが、週1時間程度の中国語講座のほかにほとんど自身で勉強を行わなかったことは現在でも後悔している。

出発の日、飛行機が羽田を発ち、機内は中国語が飛び交っている。ここから中国研修は始まった。北京に到着し、研修に参加する3人が传媒大学に到着するまでは(一難あったものの)無事に済んだが、到着してから宿泊先の留学生用の寮まで辿り着くまでに非常に時間がかかった。寮の場所が分からなかったため、キャリーバッグを引きながら大学構内を1時間程度歩き回り、友人が中国語で寮の職員方に聞いて結果どうにか辿り着いた。彼がいなければ路頭に迷っていたらと思う。また、“日本であれば寮にはすぐに着けただろう”とも思ったが、ここは中国であり、当然ながら“日本であれば”を期待して良いのは日本においてのみだ。過剰な歓迎をされずかえって気が楽だったかもしれない。

到着から一日空けて、授業が始まった。授業は1班から6班までの習熟度別のクラスに分けられて受ける形式となっており、私は最も易しい1班に所属することとなった。授業は中国語の発音・聞き取り、漢字の読み・書き、といった4種に分類され、それぞれ異なる先生が担当していた。漢字の読み・書きは1班ということもあってか、すでに日本で習ったものが多く簡単だったが、中国語の発音・聞き取りは不慣れなこともあり難しかった。いずれも、1班の授業は英語で説明してくれるため、中国語がほとんど分からない私でもとても理解のしやすい内容だった。また、一人ずつ行う発音練習や、チーム対抗の発音当てクイズといった、参加型の授業が行われていて、日本では無い形式なので新鮮で、なにより楽しく学ぶことができた。

授業は午前のみで終わるので、午後は観光に時間を使うことができた。滞在中には紫禁城や、北京動物園、オリンピック公園、中国人民革命軍事博物館など様々な場所を巡った。北京は広く観光地も多いため、すべてを訪れることはできなかったが、訪れた場所は総じて目新しく、飽きることがなかった。

生活をするうえでは、現金での支払いが不便だった。中国では支払いはスマートフォンを用いたQR決済が主流になっており、実際にコンビニ、スーパー、食事や、自動販売機、地下鉄などあらゆる場面で利用できる。しかし、QR決済を行うためには現地銀行と契約する必要があり、2週間の滞在では現実的でない。そのためQR決済ではなく現金で支払うことになるが、コンビニでレジに十分な釣り銭が用意されておらず、別のレジに取りに行き時間が掛かる、ちょうど支払うように言われる、といったことがあり不便だった。QR決済は非常に便利で、加えてシェア自転車のようなQR決済が前提のサービスもあるので、銀行口座

を持っている人に頼む、出国前に日本であらかじめチャージするなどしておくといいと思った。PM2.5を心配していたが影響はなかった。むしろ路上で煙草を吸う人が多く、そのせいか滞在2週目には喉が痛くなった。いずれにせよマスクがあると安心できると感じた。食事は美味しいうえに安価で、体調を崩すこともなかった。麺系は手打ちの店も多く食感が特に気に入った。機会があれば是非また食べてみたい。

また、現地の日本人留学生の方々には僅か2週間の滞在中に2度食事に誘っていただいたり、参考になる話を聞かせていただいたりと大変お世話になった。

日本に帰国する際、チェックインが遅れ手荷物検査を出発15分前によく終わる、という経験もした。搭乗口の場所すら分からず焦っていたとき、帰国便の搭乗口まで運んでくれた電動カートのドライバーには感謝している。運賃に100元支払ったことを含め良い思い出になった。

2週間の滞在中で、語学研修としては期間が短かったように思える。しかし、2週間のうちに中国の歴史・文化・慣習に触れることができ、行ってよかった、と感じることができた。序盤に書いたように私は中国語がほとんど分からない状態で研修に望んだ。2週間では勉強できたことも少ない。今回体験できた“中国”も全体からみればごく一部だろうと思う。だからこそ、中国語を勉強しもう一度中国に行ってみたい。そういった意欲が湧いてきた。多くのことを学んだ研修だったと思う。

最後に、一緒に留学した2人、現地の日本人留学生の方々、職員の方々には何度も助けられました。ありがとうございました。

ソフトウェア情報学部 Rさん

私はこの度9月10日から24日までの2週間の間、中国の北京にある中国伝媒大学に語学・文化の研修を参加してきました。私は元々中国人ですが、小さい頃に日本に来ており、また長く日本に住んでいるので、中国語は話せるものの、最近是中国語の語力に力不足を感じていました。ですので、私は中国語を再勉強することと中国の大学の雰囲気・文化を体験することを目的として、この度研修プログラムに参加させていただきました。高校受験の時から今までずっと忙しかったので、一度も帰国することができなかつたため、今回は私にとっても、四年ぶりの帰国となっており、とってもワクワクしました。

今回は私を含め3人の学生が夏季研修に参加しました。私は実家へ帰るため、一足先に日本を発ちました。そして実家で1週間滞在し、北京へと向かいました。この研修では引率の先生もいなく、中国伝媒大学からの迎えもないため、私が後からやってくる残りの二人を空港で迎えることになりました。無事二人も中国へ到着し、いざ中国伝媒大学へ行くとしていた時、私たちに（主に私に）あるハプニングが発生しました。実は私はリュックを地下鉄の中に忘れたのです。中国の治安は悪いときっと皆さんは思っているでしょう、私もそう思います。特にスリなどが多いです。ですが、私のリュックは無事見つけることができました。というのも、私がリュックをなくしたのが、北京市内と空港を結ぶ唯一の地下鉄だったためです。この地下鉄は空港と北京市内の二つの乗換駅にしか止まらないことと、專線であるから25元（北京市内の地下鉄は一番遠くでも7元で行ける）と高い目の定価設定をしているため、スリさんたちも中々ここで盗みを働こうとしないのです。おかげさまで、1時間を待った（片道30分）結果、私のリュックは私が忘れていた場所で見つけることができました。

予定より一時間遅れて大学に到着、ここでまだ新たなハプニングが発生しました。“大学についたら、まず国際交流センターという留学生寮へ向かえ”と教えられたが、実際は現地では違いますといわれ、国際交流センターと留学生寮は全く別のところであることが判明しました。留学生寮の場所を教えてもらい、そこへ向かいますが、到着したら“連絡を受けていません”といわれ、入寮を拒否されました。事前にもらった、中国伝媒大学で留学生を管理している先生の電話に私が何回かけても出ないため、寮の方に頼んで電話してもらいました。ここでやっと、別の場所で部屋を取って置いてくれたことが、連絡することを忘れたいと判明しました。後に判明したのですが、当の先生は私の電話番号を知らなかつたため、いたずら電話だと思い、出なかつたらしい。住处を探し求め1時間半、やっと目的の寮につきました。

いろいろと波乱万丈だったが、翌日一日休み、その次の日から授業が始まりました。今回の研修では中国語のレベルに応じて1から6まで6個のクラスに分けられました。私は中国語ができるため、6班に入ることが決定しました。残りの二人は1班です。6班は各班の中でも一番人数が少ない班で、10人しかいませんでした。しかし学生たちの中国語のレベ

ルがとっても高く、日常生活レベルの会話は全く問題にもなりませんでした。授業はどの班でも基本午前中に2つ(8時~12時の100分授業×2)、午後は休みというスタンスを取っています。なので、午前の授業が終わると、午後は観光に行ってきました。また、どの班でも授業は基本読解・聴写・作文・文法などの授業をレベルに応じて、行っていますが、6班だけは少し違いました。生徒たちのレベルが高いため、授業形式だけではなく、ディベート形式で行われることもありました。

6班の生徒たちは様々な人がいました。国はもちろん、韓国、北朝鮮、ロシア、メキシコ、マレーシアと様々ですが、特に気になったのは彼らの職業です、そう“職業です”。この研修は大学が開催していますが、大学の留学生のみではなく、自費生という制度もあり、一般の方でも、受けることができます。ですので、6班にいる学生は留学生はもちろん、元々韓国と北朝鮮の関係を専門としていた学者だが、中国の影響が強くなったため、中国語を勉強し始めた50歳くらいの方やマレーシアで生まれ育った華僑で、俳優やモデルとして働いているが、親に“お前は中華人だから、もう一勉強して来い”と言われ、中国語を再勉強している方など、ほかにも様々な背景を持つ多くの方がいました。

今回中国へ久々に戻り、すごく大きく変化したと感じました。変化したことはいっぱいありましたが、一番気になったのは、QR決済とシェア自転車です。地方ではまだ完全にというわけではないのですが、都会ではすべての店がQR決済を実施していました。街頭ライブもギターケースの代わりにQRコードを置く人もいました。現金を持たずに出歩く人が増えてきたからではないかと思いました。しかし、QR決済を使うには、中国のアプリWECHATかALIPAYが必要なので、中国人にとってはすごく便利ではあるが、旅行者にとっては少し不便です。しかも、店によっては、現金を出すと嫌がられることもありました。また、シェア自転車とは、町中に止まっています、30分1元(約15円)で乗れる自転車のことです。置いてあれば乗れる、好きな場所に止められるとっても便利な代物です！しかしこちらは先ほどQR決済を使用するため、旅行者にとっては少し不便かもしれません。今ではシェアバイクやシェアBMWまであります。これらは実名制を強いられている中国だからことできることであると言えるでしょう。

今回の研修は2週間と少し短めでしたが、たくさんの方と出会えることができました。また、中国語の再勉強もでき、文化の変化をも感じました。実家にも4年ぶりに帰ることができ、すごくうれしかったです。すごく充実した2週間で過ごすことができました。